

J・F・カルチ編

杉崎真一・河原紀子・青木行子訳

『ソ連と東欧の農業』

J. F. Karcz, *Soviet and East European Agriculture*, University of California Press, 1967, 445pp.

丸毛 忍

本書は *Soviet and East European Agriculture*, edited

by Jerzy F. Karcz, University of California Press, 1967,

445 pp. の翻訳である。内容は、一九六五年八月二六～二八日

カリフォルニア大学サンタ・バーバラ分校で開催されたソ連農

業・農民問題学会の第二回会合に提出されたペーパーを集めた

ものであり、編集者J・F・カルチの序文が付されている。学

会は一九六二年に設立され、故ナウム・ジャスニーを会長とし、

主としてアメリカの大学、研究機関、農務省などの社会主義農

書評 J・F・カルチ編、杉崎他訳『ソ連と東欧の農業』

業の研究者をメンバーとしている。第二回会合の場合にもこれらの人々が主な報告者やコメンターを勤めたが、グラスゴー大学のアレク・ノーヴ、パリ高等学院のバジル・ケルブレイ、ミンヘン自由放送のケイス・ブッシュ、ザグレブ大学（ユーゴスラヴィア）のルドルフ・ビチャニチらが、特にヨーロッパから加わっている。

従来、農業問題の研究はソ連研究のなかでも一番弱い面であり、本書がささげられている故ウラジーミル・チモシエンコ、報告論文を寄せているナウム・ジャスニー、ラザリー・ヴォーリンの三元老がほとんどすべてを引受けていた。あとの二人もこの学会の翌年相次いで世を去ったが、本書をみると、かれらの播いた種がみのり、アメリカの大学や研究所にはソ連や東欧の農業の研究者がかなりの数働いており、研究も随分分化してきたことが痛感される。

本書に含まれる報告論文は全部で一四、それぞれ一ないし二のコメントがついている。報告論文は取扱っている主題にしたがってほぼ次の四つの部分に大別される。以下順を追ってその内容と問題にふれてみよう。

- 一、農業政策 一～三章
  - 二、農業技術 四～七章
  - 三、農業経済 八～十一章
- ソ連農業

## 四、東欧農業 一二一—一四章

(注) 拙稿『三人の農業経済学者の死』(『総研月報』昭和四三年二月号) 参照。

## 二

学会の開かれた一九六五年は、約一二年間つづいたフルシチョフ農政が新しい指導者に引継がれ、同時に一九六三年以来ソ連が大量の小麦を外国市場で年々買付けるといった事態が起こり、社会主義農業の諸欠陥が新しく暴露された時期であり、またソ連・東欧の社会主義経済体制が「利潤導入」という言葉で象徴されるような経済改革、経済自由化の問題に当面しはじめた時期であった。したがって本書のソ連農業に关する諸論文は新しい歴史的地点からするフルシチョフ農政の評価に、自ら一つの焦点があるといつてよい。

第一の部分は三つの論文からなる。まずヴォーリンの「フルシチョフとソ連農業」はフルシチョフ農政を総括的に取扱う。

ヴォーリンによれば、フルシチョフは従来のソ連指導者たちが、農民のなかにはいつて農業を指導しようとしたが、かれの政策の農民にたいする経済的誘因や農業投資は不十分であり、かつ時期的に動揺変転して一貫性を欠き、処女地開発、とうもろこし栽培などは場当りので、科学・技術的にみて疑問があつ

た。かれは短期間に僅かの費用で過大な目標を追いすぎ、政策遂行の過程で官僚を圧えようとして、逆に官僚組織のコンペヤのなかに捲き込まれてしまい、結局、農業生産の増大、農民所得の引上げにも失敗し、孤立化してしまつたという。

レイアードの「農業におけるフルシチョフの行政改革とその評価」の見地はもっとシビアである。レイアードは、フルシチョフをスターリン批判者というより、むしろ「スターリンの上からの改革の完成者」、農業を官僚機構のピラミッドのなかに包摂した人間とみる。フルシチョフの行政改革は、過大な生産目標の追求と相まって、党官僚の農業にたいする介入を強め、制度化しただけで、農民には何の利益もなく、農業制度を基本的には変えなかつた、農場における意志決定の自主性の増大という根本問題は無視されたままであつたという。

ノーヴの「農民と役人」はソ連の小説を材料にして、公式文献には現われていない農民と役人との關係を追求する。かれは、役人の国家供出の手先のな態度と農民の利益の無視、農民の役人不信とサボタージュについての幾つかの具体例を示し、それがフルシチョフの行政改革を妨げたことを指摘する。

書評者もソ連の農村を旅行して、フルシチョフの導入したアメリカ流のエクステンション・システムが全く上からの引回し政策に戯画化されているのを見つけたが、ソ連の農業もまた経

済誘因や投資に新技術の導入が増加すれば、当然急速に発展するはずであるのに、従来必ずしもそうっていないのは、上記の論文にみたような、社会主義農業の制度上、あるいは農民心理上の根本問題が今後解決されねばならないことを物語るものであろう。

第二の部分は四つの論文からなる。ジェンセンの「農業の地域区分およびその発展に関する考え方」は、ソ連で多くの学者たちがこの問題を論じているが、結局、最小生産費の原理を主張するだけで、農業の適正な分布と特化の実現にほとんど役立っておらない。生産費関係データの不足とソ連の農業計画が依然としてさまざまな政治的圧迫や行政的介入の下におかれているのが、その主たる理由だという。以下の三論文は地域区分と関連してフルシチョフ時代の耕種技術の問題を取り上げている。アンダーソンの「フルシチョフのともろこし計画の歴史的・地理的考察」は、ソ連のともろこし増産計画の失敗の跡の精緻なアプローチである。ヴェデキンはソ連の役人や技術者もともろこしの適地不適地の別は承知していたはずだが、フルシチョフから中級、下級にいたる指導者までみな、その時期時期の政策の成否に政治的生命をかねねばならぬ共産党の伝統がこの破局を生んだとコメントしている。

ハルトキストの「ソ連の甜菜生産——農工一体の地理的局

面」は、甜菜栽培の集中度・特化の遅れ、収量の低さ、貯蔵施設の貧弱、高い運送費、加工能力の低さと地域的アンバランスを分析し、ソ連の農業、特にアグリビジネス的側面の非効率を明らかにした論文である。コメントによれば、改善の方向は農民への報酬の公正化にあるという。

ジョラフスキーの「輪作の概念と発展」はウイリアムスの牧草圃式輪作方式の批判である。これは無機肥料を使用せず、広い牧草圃を設けることによって土壤構造を改善しようとする時代遅れの作付方式にすぎないが、政府の一方的な供出政策の要請に好都合だったので、正統派学者の批判を無視して採用された。が、実際には農民にも拒否されて計画のように普及せず、一九六一年フルシチョフによって最終的に放棄された。書評者が会ったソ連農業省の役人も「ウイリアムス農法は学者の机上に存在していただけで、農民はそんなことはやってない」と秘かに語っていた。その後フルシチョフは一転してともろこしなどの中耕作物の導入、休閒の廃止にもとづく近代的な輪栽式農法を採用して失敗する。論文は学理と政策の両面からこの過程を明らかにしていく。

以上の四論文は、ソ連の農業技術がなお充分な技術的経済的裏づけをあたえられず、時々の政治的要請によって激しく揺り動かされる不安定な状態にあること、ウイリアムスやルイセン

この国粹主義によって世界の科学から孤立化されたことを示している。

第三の部分は四つの論文からなり、若干の推計を含み、本書のなかでは一番興味深い。ニミッツの「一九二八―六三年のソ連の農場雇用」は、農業各部門に投入された年平均の成人労働日数の丹念な推計をやり、これをソ連の公表統計および西欧の他の学者の推計値と比較検討している。推計の手続きや確率誤差などには問題もあるが、ここでは触れ得ない。かの女の分析によると、ソ連の各地で非農業部門の不熟練労働力が過剰になっておるが、農業部門は農業部門で農業生産の増大と低い農業所得を引き上げるためには、労働生産性を急速に高めねばならない。農業投資をふやすだけでは駄目で、非農業部門が農業の輩出する労働力を吸収できるかどうか、結局問題だという。

ドッジ、フェッティンバットの「ソ連農業における女性の役割」は、女性の農業労働力の特徴、かれらを農業各部門に参加させる諸要因を分析し、女性の大部分が技術を要せぬ肉体労働に従事しており、また個人副業経営で長時間働くことを明らかにしている。

ウォルターズ、ジュデイの「一九七〇年までのソ連の農業産出高」は、過去一二年の農業産出高の趨勢を引きのびし、それを新五五年計画の数字やソ連の若干の研究によって補正しつつ、

一九六九―七二年の農業産出高の推計を試みたものである。かれらの推計は、たとえば穀物生産高を下限でも一億四八〇〇万―一億六二〇〇万トン（収納量計算）とみており、かなり樂觀的である。これが実現されれば、消費者の西欧に較べてかなり低い実質所得は、若干改善されるであろう。

ジャスニーの「ソ連農業の生産費と価格」は、ソ連の農産物価格と生産費の研究をつうじて、それらが資本主義諸国の価格と生産費に較べていかに高いかを立証しようとして試みたものである。かれはルーブリ―ドルという比価で計算した食料穀物、飼料、家畜・畜産物のソ連および資本主義諸国の価格を示し、ソ連の価格、生産費の高い理由としてソ連の農業労働生産性がアメリカの三分の一であること、豚肉価格と飼料価格との比、豚と豚肉との産出比、飼料の質、機械の耐用期間などにソ連とアメリカの間に大差のあることをあげる。ロウプのコメントはジャスニーの計算が作意的な誇張や粗雑な見落としのあることを指摘し、修正を試みているが、それでもたとえソ連の豚の枝肉価格はアメリカの二・七倍に当たっている。ソ連の農産物の価格ないし生産費が国際的にみて極めて高水準にあることは間違いないようだ。

上記の四論文はソ連農業が大規模機械化経営であるにもかかわらず、低効率でコストが高く、国民の消費水準は西欧などと

較べるとずっと低いことを明らかにしているが、同時にソ連農業の将来の発展の可能性をも決して見落してはいないといえよう。

### 三

第四の部分は、東欧諸国のうちでもっとも特徴的な道を進んでいる三国を取扱った論文から構成されている。ハルペーンの「生活様式としての農業——ユーゴスラヴィア農民の態度」は、ユーゴスラヴィアの農民はかつて共産主義に反対して集団農場を解体し、個人経営を主体として農業をのばしてきたが、工業化の影響で農民の価値観が変化し、農業を生涯の仕事として選ぶものはほとんどない。農工間の所得バリエーションの差は農民離村の決定的なファクターである。農業人口は老令化し、多数の通勤農家のなものを生じている。ユーゴ当局は公式的には社会化をつうじて農業の一層の発展を計ると声明しているが、現実にはほとんどその兆候はみられないという。

コルボンスキーの「一九五六年以降の社会主義ポーランドにおける農民的農業——集団化に代わる道」によると、ポーランドの状況はユーゴとよく似ている。ポーランドは一九五六年の集団農場解体後、農民的農業を基盤として農業生産を増加し、農民の所得を高めてきたが、ユーゴの場合と同様若年層の離村、

農業人口の老令化、通勤農家の急増などの現象を生じ、傍ら経営の極端な細分化、過剰人口の潜在がみられ、食糧自給の問題も未解決のままである。コルボンスキーはポーランド農業の社会化についての四つの見解を紹介しているが、農業生産の増大、所得の向上がストップしないかぎり、農民が現在の個人経営を放棄して上記の道のいずれかを選ぶ可能性はまずないという。

ラザールチェクの「第二次大戦以降のチェコスロヴァキア農業の成果」は、チェコスロヴァキアでは農業はほとんど社会化されているが、農業の発展は停滞しており、戦前と違って食糧の輸入国となっていることを、生産と投入の分析をつうじて明らかにし、チェコスロヴァキアの経済改革の動きの一環としての中央計画の廃止、農場の直接的な計画作成と自主性の拡大、価格機能の重視、市場誘因の導入が、農業にどのような変化をもたらすかに期待をかけている。

上記の四論文を読むと、東欧は戦後社会主義体制をとったが、農業の発展テンポは西欧よりむしろ立ち遅れており、東欧のなかでも後進的なユーゴスラヴィアとポーランドは、集団農場を解体、主として個人経営をつうじ生産と所得をのばしてきたが、いまや社会化の方向へのなんらかの改革の必要に迫られ、先進的なチェコスロヴァキアは不振な集団農場の立て直しに市場誘因の導入を計りつつあることがわかる。社会主義農業の当面す

る問題の複雑さが察せられよう。

#### 四

以上で個々の論文の内容の紹介をひととおり終ったが、そこでの問題には深く立ち入ることができなかった。

改めて総括的にみれば、本書は学会報告としての性質上、個々の論文は比較的簡単なが、今日の西側における第一線の社会主義農業の研究者を多数動員しており、かれらの研究の方法と水準をよく示している。

周知のように、資本主義のもとでは農業の発展は小農形態を維持しつつなされ、生産力の展開はさまざまの制約を付されている。資本主義の法則は農業部面では本来の姿では現われ得ないのである。ある意味で全く同様に、社会主義のもとでも、この小農形態は社会化されるが、農業はやはり工業とは異質であり、そこではなお社会主義の法則は自己を貫き得ていない。社会主義大農場の生産力は、西欧や北米の家族農場の生産力の平均水準よりもずっと劣ってさえている。これが今日の社会主義農業の現実にはかならないが、「一体何故だろうか」。このような問いの具体的な諸局面が、いわば論文の筆者たちの課題なのである。かれらは本書のなかで、フルシチョフ失脚後の転換点にたつソ連農業の多面的な分析、東欧のなかでもっとも個性的な

道を行く三国の農業の分析をとおして、それぞれの局面で今日の社会主義農業の問題点を明らかにしているといえる。

大多数の筆者たちの立場は家族農場と市場経済とを支持するもののように読みとれるが（ロマノフスキーのようにポーランド農業の社会化を支持するものもある）、厳密な学問的方法を堅持しており、ジャスニーをのぞいては社会主義農業の否定面を特に誇張するようなどころもなく、その将来についても客観的なみ方を喪っていない。本書の立場に同調できない場合でも、実証をつうじて本書の諸論文に反論することはそう容易でないであろう。

本書の翻訳刊行はわが国の農業関係者のソ連東欧農業の理解に大いに貢献するに違いない。その意味で刊行者である農林水産業生産性向上会議に敬意を表したい。また特殊な用語の多い本書の翻訳者たちの努力を多としたいが、若干の瑕瑾は間わないとしても、訳文が総じて読みづらく、一読直ちに文意が判明しがたい箇所があるのは少し残念な気がする。